



第13回

モーツァルト交響曲 全曲演奏会

2013年10月14日(月・祝)

◆ 開演 ◆ 14:30 ◆

— 会 場 —

ザ・ハーモニーホール／小ホール

(松本市音楽文化ホール)

主催／モーツァルト交響曲・全曲演奏会 実行委員会

後援／松本市・松本市教育委員会・塩尻市・塩尻市教育委員会・安曇野市・安曇野市教育委員会・信濃毎日新聞社
SBC信越放送・NHK長野放送局・長野エフエム放送・あづみ野エフエム放送・(公財)八十二文化財団

よこしまかつと

ザルツブルグ宮廷に仕えながらも演奏や就職活動のためにヨーロッパ各地を旅し、やがて「召使同様の」宮廷音楽家から大都市ウィーンで自由な音楽家として新生活を始めたモーツァルトは、その生涯に多くの貴族や君主と接触しました。13回目を迎える今回の全曲演奏会はこのモーツァルトを取り巻く裕福な音楽愛好家たちに焦点を当ててみようと思います。

【パトロナージュ】

音楽の経済的支援(パトロナージュ)の歴史では、モーツァルトは重要な位置にある。彼が生まれた当時の社会構造は次のようなものであった。すなわち、教会や王侯の宮廷に雇われるという形態に頼らずに何不自由ない生活を望めたのは、運よくオペラに携わることのできた作曲家だけであった(オペラでさえ、貴族の援助に大きく依存していた。そうした保護者たちは、すべてを自分の意のままに運ぶことができた)。モーツァルトが天才児としてヨーロッパの都市を回り、貴族のサロンで姉ナンネルとともに驚くべき楽才を発揮してみせたとき、彼は異例なほど早い年齢で父親から音楽のパトロナージュの現場に導き入れられたのであった。

ザルツブルグでは、宮廷から年棒が支給されたが、貴族からの注文も大切な活動であった。ザルツブルグのロドローン伯爵夫人やパリ旅行中での音楽愛好家貴族ギーヌ公などに作曲され、ザルツブルグ固有のジャンルであるセレナードやディヴェルティメント等、多くの祝宴のための機会音楽が貴族からの要求で作られた。

【ウィーンの経済】

1781年、ザルツブルグの宮廷が、当時25歳であったモーツァルトに解雇を言い渡した頃、ウィーンは拡大の方向に向かい、市壁の内部だけでも8万人以上の住民がひしめき裕福な都市になりつつあった。ウィーンの庶民の大部分は必要最低限の生活をして、かろうじて生きている状況であった。裕福な人々と貧しい人々の生活の差が大きいという点ではウィーンも他の都市と同様であったが、外国からの訪問者はこの大都市における格差はとくにひどいことに気がついたはずである。それでも18世紀後半のウィーンには魅力があった。そこには音楽と、劇場と、出世の機会があふれており、裕福な、あるいはそうなるろうとしている消費者をひきつけた。

モーツァルトがコロレード大司教と決裂してウィーンに移った1781年以降、彼が得た有給の地位はたった1つだけであり、それも皇帝ヨーゼフ2世によって1787年に任命されたウィーンの宮廷楽師という、そして重要ではない職であった。そのためモーツァルトは生涯のあらかたを個人的なパトロンに頼り続けていかねばならなかった。

【ウィーンでの成功】

ウィーンでは、食っていくためにも、作曲家としての成功を収めるためにも、モーツァルトは到着した瞬間からあらゆる手を尽くした。モーツァルトは家族や大司教にためらうことなく挑戦を開始し、驚くほど広い範囲の活動に手を染める。事実、わずか2、3年の間に広い範囲の人々を手にいれてしまう。その範囲の広さはおそらくハイドンやベートヴェンを上回っており、皇帝ヨーゼフ2世やフランツ大公らをはじめとする宮廷筋の寵愛を得たばかりでなく、音楽愛好家の貴族や外国の来賓、外交官にまで及んでいた。

【モーツァルトのパトロンたち】

モーツァルトの支援者でもっとも重要なのは、トーン家とヴァン・スヴィーテン伯爵であった。トーン伯爵はリンツとプラハの両方に邸宅を構えていた。モーツァルトは両都市で伯爵の客として迎えられ、1783年には交響曲「リンツ」KV425(第11回全曲演奏会プログラムノート参照)を伯爵に献呈している。ヴァン・スヴィーテン伯爵はウィーンの帝国図書館の館長であり、音楽の好古趣味をもち合わせていた。伯爵はオラトリオの演奏のために音楽家芸術家協会を創設し、モーツァルトに「メサイア」など4つのヘンデルの作品の編曲を依頼した。そしてモーツァルトの死後、ヴァン・スヴィーテン伯爵は彼の葬儀の準備を引き受け、のこされた子どもたちに援助の手をも差し伸べたのである。

【伝統の最後の継承者】

…偉大な巨匠たちの亡骸の上に、そしてまた彼らが尊敬してやまぬパトロンたちの上に、平安あれ、我々がこうした価値のある芸術作品を味わうことができるのも、パトロンたちの心の広やかさのお陰なのであるから……

この文は1964年に発見された、「レクイエム」の依頼状況を細かく綴ったヘルツォークによる言葉である。

18世紀の経済的支援は、たとえ虚栄心がしばしばその動機であったにせよ、ヘルツォークの言葉でまとめられる。貴族階級による経済的支援という伝統全体に手向ける墓碑銘ともなりうる。モーツァルトはこの伝統の最後の重要な継承者であった。

●交響曲 二長調 Sinfonie in D KV385

(26歳 1782年7月末～8月初め ウィーンで作曲)

Allegro con spirito, Andante, Menuetto-Trio, Presto

[フルートとクラリネットはのちに、おそらく1783年初めに追加されたもの、1785年にウィーンで作品7の1として出版]

【作曲をめぐる状況】

KV385の作曲をめぐる状況については、モーツァルトの他のどのシンフォニーよりも十分な記録が残されている。1782年7月半ばにレーオポルトは手紙を書き、パトロンでもあり、ヴォルフガングの幼少からの友人でザルツブルグ市長の息子のジークムント・ハフナーが爵位を授与されるお祝いのために、新しいシンフォニーを1曲作曲するよう依頼した。7月20日、ヴォルフガングは次のように返信している。

……今少なからぬ仕事があります。来週の日曜日までに、ぼくのオペラ〔《後宮からの誘拐》KV384〕を管楽器用に編曲しなくてはなりません。さもないと、ほかのだれかに先手を打たれて、ぼくの代わりに儲けを横取りされてしまいます。それに新しいシンフォニーを一曲書かなくてはならないとは！ 一体どうしたらそんなことができるんですか？……

PROGRAM NOTE

ヴォルフガングは、仕事をぐずぐずと引き伸ばす性癖があり、その都度父親宛ての手紙の中で言い訳をしているのだが、この場合、彼の苦情はもっともなものであった。彼は新作のオペラ上演という骨の折れる仕事をやり遂げたばかりであり(後宮からの誘拐、7月16日初演)、結婚に先立って、7月23日に行なう引越しの準備を進めていたからである。

ヴォルフガングは31日の手紙の中で

……ぼくの誠意をわかってください。でも出来ないものは、出来ないのです！ですから次の便まで、シンフォニーを全曲お送りすることはできません。……

8月4日、ヴォルフガングとコンスタンツェ・ウェーバーはウィーンで結婚したが、その時はまだ、レーオポルトがしぶしぶ同意した手紙を受け取っていなかった。同意の知らせは、その翌日に届いたのである。この間、全楽章が完成し、レーオポルトのもとへ送られたに違いない。なぜなら8月7日付の手紙で、ヴォルフガングは次のように書いているからである。

…… 短い行進曲を同封します！すべてがうまく間に合い、あなたの好みに合うといいのですが。第1楽章のアレグロは、すごく情熱的に、終楽章はできるだけ速く演奏されなければなりません ……

【ハフナーシンフォニーからの考察】

《ハフナー》シンフォニーはモーツァルトの生前にウィーンとパリで出版され、パリではコンセール・スピリチュエルで演奏された。この作品は、恒に人気を博してきた非常に魅力的な作品であるが、にもかかわらず、このジャンルにふさわしいと当時一般的に考えられ、モーツァルトが間もなく訣別することになる因襲的で華やかなスタイルに、なお固執していることを否定できない。モーツァルトはレーオポルトの好きな二長調を選び、父親の趣味に合うかを心配し、伝統的なラインに沿うようにこの曲を構想したことは、まだ彼が守りの姿勢をとることによって無意識のうちに父親の理解を得ようとしたのである。一方レーオポルトの方も、反抗的な息子の人生の送り方についてどんなに疑問をもとうとも、実際には生涯にわたってヴォルフガングの音楽を楽しみ、それを認めていたのである。

●交響曲 へ長調 Sinfonie in F KV76(42a)

(11歳 おそらく1767年秋 ウィーンで作曲)

Allegro maestoso, Andante, Menuetto-Trio, Allegro

【真正性】

このシンフォニーKV76(42a)をモーツァルトの作とすることには問題があるのだが、にもかかわらずその真正性については最近まで本格的に議論されることはなかった。この作品には自筆譜が残されておらず、家族や仲間うちに由来する信頼性の高い筆写譜も伝えられていない。ただ一つの資料は18世紀の手書きのパート譜のセットである。これはナンネルからブライトコプフ社に送られ、同社の手稿譜目録の第9ページに第57番として掲載されたものである(現在は紛失)。

【疑わしい作曲年代】

オットー・ヤーンはこの作曲年代を「177?年」としたが、ケッヘル(第7回全曲演奏会プログラムノート参照)は思い切って「おそらく1769年」とした。それに対して音楽学者アインシュタインはケッヘル第3版において、出所不明のこの作品の作曲年代を「1767年秋、ウィーン」としている。このシンフォニーのメヌエットについて、アインシュタインは「この楽章は、他の3つの楽章と比べるとはるかに円熟しているので、後から作曲されたと見てよいだろう」と述べている。彼がつねづね指摘しているのは、ウィーンのシンフォニーがふつう4つの楽章をもっていたこと、またモーツァルトが時折、3楽章のシンフォニーにメヌエットとトリオを付け加え、ウィーン人好みに合うように仕立て直したと考えた。このことからすれば彼は、メヌエットとトリオの付加を、一家の皇都訪問と関連付けて考えたに違いない。

●セレナード 八短調 Serenade in C KV388(384a)

(26歳 1782年、ウィーンで作曲「自筆譜による」)

Allegro, Andante, Menuetto-Trio, Allegro

この八短調セレナードKV388(384a)は、モーツァルトのハルモムジーク(第8回全曲演奏会プログラムノート参照)のうち、唯一自筆譜に題名が付された曲である。モーツァルトは当初、この種の曲をさす用語としてウィーンでよく使われた「パルティア」と書いたのだが、後に「セレナード」と変更している。そうすると、この曲が夜に演奏されることを前提にして作曲されたことだけは確かといえるだろう。セレナードとしては唯一の短調をとること、それに伴う厳粛な音調、通例の5楽章ではなく、4楽章構成の選択。この作品はこれらによってモーツァルトのセレナード群において独自の位置を占めている。この作品が生まれた頃、モーツァルトはヴァン・スヴィーテン男爵のもとでパッサ、ヘンデルの音楽を知る機会を得ており、短調の選択はこうしたバロック音楽体験に由来するものであろうと言われてきた。だが後にモーツァルトはこれを弦楽五重奏に編曲しているが[KV406(506b)]、その移行を可能ならしめた内容の深さには、バロック音楽との一面的な関連を寄せつけない古典的な旋法の充実が感じられる。

【名前の由来】

作曲年代については自筆譜に「1782年」というモーツァルトの記載があることから、この7月の父レーオポルトへの手紙に登場楽曲がこの作品であるとされてきた。レーオポルトがジークムント・ハフナーの婚儀のために交響曲を1曲書くようにと言っているのに対して、7月26日、モーツァルトは答えている。

……これ以上書けません。だって大急ぎで管楽器用のセレナードを一曲書かなくてはならないのです。……

この手紙でモーツァルトはこのセレナードを「ナハトムジーク[夜の音楽]」と呼んでいるため、このKV388(384a)にはこの名称が付されてきた。

★参考文献 モーツァルト「おもしろ雑学辞典」、「モーツァルト」P.ゲイ、「モーツァルト大辞典」ロビンズ・ランドン著、「モーツァルト」メイナード・ソロモン著、「モーツァルトのシンフォニー」ニール・ザスラウ著、「モーツァルト事典」海老沢 敬著、